

遠藤周作『侍』論

——心情変化にみる長谷倉の到達点——

岩 崎 里 奈

序

『侍』は、書き下ろし長編として一九八〇年四月に新潮社より刊行された。奥州伊達藩の武士支倉常長と司祭ソテロが、藩の命を受けて一六一三年月ノ浦港からノベスパニヤに向かった実際の出来事を素材とした作品である。

遠藤は『侍』の新刊案内に寄せて、

常長にとって、この旅行は、単なる旅行ではなかった。彼はヨーロッパの王に会いに行き、事実、エスパニア王やローマ法王に出会ったが、しかし本当に廻りあったのは惨めな「別の王」だったのである。⁽¹⁾

と紹介をし、旅を通じて長谷倉が「ヨーロッパの王」ではなく「別の王」、即ちイエスと出会うことを示唆しているが、その過程を追うためには歴史上の支倉の旅ではなく遠藤の描く作品における長谷倉の旅の本質に目を向けることが重要である。

長谷倉は、一六一三年に主君の下す命令に従い日本を発った。命令とはいえこの旅は、長谷倉にとって、父や叔父が執着をする、先祖代々受け継がれてきた黒川の土地を取り戻すことができる唯一の望みでもあった。旅の途中、通

辞として同行する司祭のベラスコから、日本での切支丹禁制を受けてヨーロッパの教会が長谷倉一行の預かった殿の御書状が偽りだと捉えていることに對し、その疑いを晴らすためには切支丹になることだと勧められる。この時、長谷倉は「先祖や父の知らぬ南蛮の宗派におのれ一人が帰依することはできない」と考え、先祖代々の土地の奪還の為に切支丹になる必要性を知りつつも、先祖とは違う信仰への抵抗を感じている。しかし彼は、この任務のために「形だけ」と自分に言い聞かせて洗礼を受けた。その直前には、イエスに對して（俺はなあ……お前を拝む気にはなれぬ）（第七章）と呟いている。抵抗を感じながらも、結果として「形だけ」と洗礼を受けた長谷倉ではあるが、第十章では「ここからは……あのお方が、お仕えなされます」という与藏の言葉に大きく頷くに至る。この長谷倉がイエスに向き合っていく過程において、瘦せこけた裸体の男とイエスを捉えていたのに對し、洗礼を受ける直前の第七章においては、（お前を拝む気にはなれぬ）とすまなそうに呟いている。これは、長谷倉が旅を通じて多くの人間がこの男を信じているという事実を知り、どの町に行っても変わらないその姿に對して親近感を覚えたものの、主君の命が絶対である侍故に形だけの洗礼しかできないという思いが読み取れよう。しかし、長谷倉は何度もイエスに對して（お前）と語りかけているのである。この長谷倉の語りかけこそ、長谷倉自身の氣付かないイエスへの接近であると言える。遠藤は、人が「惨めなイエスに、同行者あるいは影法師みたいな感じをもちはじめたら、それはもう信仰だと、思う」⁽²⁾と言っている。長谷倉は、旅の途中にインディオと共に暮らす元修道士に出会う。その修道士が長谷倉に渡した「その人、我等のかたわらにまします。その人、我等が苦患の歎きに耳かたむけ、その人、我等と共に泪ぐまれ……」というイエスの話から、長谷倉は帰国後元修道士の求める「その人」の存在を認めていくのである。

一方で、通辞のベラスコは、「すべては神のため」と言いながらも、司教になるという世俗的な欲を常に抱えていた。しかし、日本の切支丹禁制によって、ベラスコの旅の目的であった日本での布教がことごとく叶わなくなった。何も果たせなかったベラスコであるが、用意されたマニラの修道院での生活を棄てて禁教下の日本に再び戻るのであ

る。ベラスコからは、「形だけでよい」と商人や、長谷倉たちを受洗させたことによる自身の罪を受け止め、彼らと共に信仰を全うしようとする姿勢が読み取れる。

先行研究として佐藤泰正氏は、長谷倉と対比して描かれる宣教師・ベラスコの存在に着目をされ、ベラスコの「回心のドラマはより強烈であり、侍の回心と明らかな相似形をなす。こうしてベラスコの強烈なドラマをかたわらにおくことによって、侍の回心に至る軌跡の旋律もみごとに生かされる」⁽³⁾と指摘された。ベラスコの真の信仰を得る過程に、信仰を本物にしていく長谷倉の姿が呼応するのである。笠井秋生氏は、長谷倉は「失望と挫折の果てに、真の信仰を得るにいたる」⁽⁴⁾と指摘され、さらにその長谷倉の信仰について長濱拓磨氏は、処刑をされる前に与蔵の言葉に領いた場面において、「このとき「同伴者イエス」の姿が長谷倉の心の中にあることは言うまでもない」⁽⁵⁾と指摘している。また、山崎正和氏の「六右衛門が真の信仰にめざめたらしいことさへ、暗示的な筆致でのめかされている」⁽⁶⁾との指摘や、槌賀七代氏⁽⁷⁾の、長谷倉は、「所謂「同伴者」としての「イエス像」を理解するに至るが、彼の内部では、一貫して、明白には「信仰」とまでは至らぬようにさえ描かれてある」と指摘された上での、「与蔵は「ここからは……あの方がお供なされます」と告げるが、長谷倉自身が、どこまで納得していたかは定かではない」という見解もある。確かに、長谷倉は一度たりとも「切支丹を信心している」とは言っていない。イエスに対して折る姿も描かれてはいない。しかしながら、長谷倉の長い旅を通じて、イエスに出会い、悩み苦しんだことによって、元修道士の持つ「その人」像の理解に至り、呼応するように描かれたベラスコが「生きた……私は……」と信仰を全うしたこと、そして何よりも、長谷倉が切支丹を信心していると認める家臣の与蔵の言葉に領いたことから、その後、黒光りするつめたい廊下を進んでいった長谷倉の姿は、全てを主に委ねて自ら十字架にかかったと読むことができるのではないだろうか。ここに長谷倉の変化が明確に示されている。

作品の最後では、ベラスコは長谷倉の死を聞き「私も彼らと同じところに行ける」(第十章)と叫ぶ。このベラス

コの叫びは、長谷倉の十字架に向い信仰を獲得していく心境と見事に呼応し響きあっていると見える。本論では、ベラスコとの旅、インディオと行動を共にしている元修道士との関わりに注目しつつ、長谷倉が最後に到達した地点に遠藤が託した主題を明らかにしたい。

註

- (1) 遠藤周作『侍』著者の言葉（『新潮』一一七頁 一九八〇年四月）
- (2) 対談「王」にあいに行った男―書下ろし長編『侍』をめぐる―遠藤周作／三浦朱門（『海』九頁 一九八〇年四月）
- (3) 佐藤泰正『侍』往相から環相へ（『佐藤泰正著作集』⑦ 遠藤周作と椎名麟三 七五頁 一九九四年十月）
- (4) 笠井秋生「遠藤周作におけるイエス像の変容（シンポジウム報告 復活する遠藤周作『沈黙』から『侍』へ――変容するイエス像）」（『文芸研究』四三頁 二〇〇四年三月）
- (5) 長濱拓磨「遠藤周作『侍』論―フィクションの内実について―」（『キリスト教文藝』四〇頁 二〇〇八年六月）
- (6) 山崎正和「歴史の亀裂―5―証明のない情熱―遠藤周作『侍』をめぐる―」（『新潮』一九三頁 一九八〇年七月）
- (7) 植賀七代「遠藤周作『侍』論」（『日本文藝学』六二頁 一九八八年十二月）

一、元修道士からの影響

第十章にある長谷倉が処刑を受ける前の場面では、次のように描かれている。

「ここからは……あのお方がお供なされます」

突然、背後で与蔵の引きしほるような声が聞こえた。

「ここからは……あのお方がお仕えなされます」

侍はたちどまり、ふりかえって大きくうなずいた。そして黒光りするつめたい廊下を、彼の旅の終りに向って

進んでいった。(第十章)

この場面からは、確かに長谷倉がイエスと向き合っていることが窺える。このように長谷倉がイエスへの信頼を持つようになったのは、長谷倉の中でそばに仕える与蔵の存在が認識されたことが指摘できる。長谷倉は帰国後、与蔵にイエスを重ねる。

うつむいた与蔵が眼をかたくつぶり、万感の思いを泳えているのが侍にはよくわかった。彼にはこの忠実な下男の横顔がふと、あの男に似ているようにさえ思われた。あの男も与蔵のように首を垂れ、すべてを泳えているようだった。(第十章)

この場面では、長谷倉のそばにいつもいる与蔵が全てを受け入れてくれる存在として長谷倉は感じている。この与蔵は、旅の途中、受洗をした商人や、侍たちの中で唯一熱心にベラスコの話に耳を傾けた人物である。ベラスコは、与蔵に対して「犬の眼」を連想し、「忠誠を誓った主人を決して見棄てはしない」「今、彼は主を同じように見棄てはしないのかもしれない……」と与蔵の信仰を長谷倉への忠誠心と共に見ている。これは、ベラスコにとって「一度、主の名を口にした者を、主は決して放し給わぬ」という信仰の証明への希望であると同時に、長谷倉の苦しみを一緒に泳えてくれた与蔵の姿を通して元修道士の言う「その人」への理解をも示している。長谷倉は、自分に言い聞かせるようにくり返し次のように言った。

「そう、あの男は共にいてくれる犬になってくれたのだ。テカリの沼であの日本人が描いた紙にこう書いてあった。あの男が生前、その仲間にこう申した、と。おのれは人に仕えるためにこの世に生れ参った、と。」(第十章)

ここから、長谷倉が「人に仕えるためにこの世に生れ参った」というイエスの認識を持つことが確認できる。この長谷倉のイエス像を考えるにあたり想起するのが、旅の途中に出会ったインディオと共に暮らす、日本人元修道

士の存在である。

日本人元修道士は、マニラの神学校で修道士の資格を得たが、神父たちに馴染めず、インディオの群れでの生活を選んだ。しかし、だからと言って切支丹を棄てたわけではなく、「パードレさまたちがどうであろうと、私は私のイエスを信じております。」と述べ、インディオの苦患に素知らぬ顔をしながら、一方では神の愛を説こうとする教会には嫌気がさしたのだと話す。この教会の考えとは、その後、宣教師ベラスコにボルグーゼ枢機卿が言った、

「一匹の仔羊を探すために他の多くの羊が危険に曝されるならば……」「牧者はその仔羊を見棄てざるをえない。

組織を守るためにはそれも仕方がないのだ」(第八章)

という場面からも伺い知れるであろう。元修道士は、新しい天地を求めてノベスパニヤまで来たが、「主の御名を借りてインディオの祭壇を焼き払」ったり、「主の御教えを広めるためと言ってインディオを村より追い払った」りする神父の姿を目の当たりにし、組織を優先する、いわゆる西洋の聖職者たちの示す教えに理解を示せず幻滅をしたのである。そして、元修道士はそれら迫害の下でも「男も女もその悲しみをこのイエスに話し、訴えるのでございます」というように、祈るインディオの中にイエスの存在を見出し、教会とは離れた「わたしのイエス」像を持つに至ったのである。

「やむなく切支丹となった」長谷倉が、「あのような、みすばらしい、みじめな男をなぜ敬うことができる」と問うと、元修道士は、はじめは「同じ疑いを持ちました」と言い、「あの方は、生涯、みじめであられたゆえ、みじめな者の心を承知されておられます。あの方はみすばらしく死なれたゆえ、みすばらしく死ぬものの哀しみも存じておられます。あの方は決して強くもなかった。美しくもなかった」(第九章)とこの現世で誰よりもみすばらしく生きられたイエスを信じることができると言い、さらに、「世界がいかに変わろうとも、泣く者、嘆く者は、いつもあの方を求めます。あの方はそのためにおられるのでございます」(第九章)と共に泣き、嘆きに耳を傾けてくれる存在だと

と述べる。この元修道士は、このように神の權威と地上の權威を取り違えているような教会の教えではなく、人間に寄り添う、遠藤の言葉で言うならば「同伴者」ともいえるイエス像を説く。「神は人間と次元を異にする存在であり、「人間を超えた絶対的なもの」という感覚を持つ西洋人であるベラスコやヴァレンテ神父に対して、この元修道士は、正統的な教会には属していなくても、「切支丹」としての信仰を守る姿勢により、自分だけの「その人」像を獲得している。これは、のちに長谷倉が「人間の心のどこかには、生涯、共にいてくれるもの、裏切らぬもの、離れぬものを――たとえ、それが病みほうけた犬でもいい――求める願ひがあるのだな。」と受け入れていく「その人」像を導くものとして示されている。ただし、長谷倉が処刑を受ける場面において、与藏の言葉に頷き廊下を進んで行った姿からは、自らの死をイエスに委ね、受け入れていったと読むことができ、必ずしも「同伴者」の存在を得た上で基督教を受け入れていくわけではないことは留意すべきである。

「日本の故郷には戻らぬのか」と言う長谷倉に対して、元修道士は、

「私は……インディオたちの参るところに参り、留まるところに留まります」（第五章）

と言っており、インディオたちの中に居場所を見つけている。インディオは二度と同じ畠を耕さないのであるが、元修道士が病に冒されたために元修道士の元に留まることを決める。そして、使者衆たちが帰国をする途中で再度テカリを訪れた際には、

「インディオたちは私のために沼にとどまってくれました。でなければ私も」彼は照れ臭そうに笑った。「テカリから遠くに移っておりましろう。時々、このインディオたちのなかにイエスの姿を見つけることができる。」「（第九章）」

と言っている。ここにおいて、元修道士とインディオの関係の中に共に悲しみをイエスに訴え、みじめな者の心を分かちあおうとする姿を見ることができる。武田秀美氏がこの元修道士が「同伴者イエスを信仰し、長谷倉をイエスの

理解に導く人物として」⁽¹⁾造形されていると指摘されるように、長谷倉にイエスと真摯に向き合わせた人物の一人であることは言えるであろう。

しかし、長谷倉の最後の場面において、長谷倉が自ら廊下を進んでいったことから、その先に待つ十字架と一緒に架かってくれるイエスではなく、十字架の向こうで迎え入れてくれる存在としてイエス像があるのではないかと考える。よって、長谷倉は、元修道士の「同伴者」という信仰のあり方ではなく、基督教の信仰をする前向きな姿勢に、影響を受けたと考える。

註

- (1) 武田秀美「侍」―新たな二つのテーマ―(『キリスト教文学研究』九二頁 二〇〇七年五月)

二、ベラスコの変化

旅の同行者であるベラスコは、作品内において長谷倉と対比する形で語られていく。無口で、自分の思いを語るのが下手な長谷倉に対して彼は強く、自信に満ちている。このベラスコを見ることによって、長谷倉の処刑の場面は暗示だけであるのに対し、ベラスコの処刑は最後まで描かれたように、ベラスコの影となり全面的に描かれていない長谷倉像が見えると考ええる。

通辞として唯一言葉のわかるベラスコは、司祭として第一に布教を望み、同行している者たちを誘導していくのである。使者衆の役目を果たすためには、日本の基督教徒への迫害を聞き、使者衆たちを受け入れようとしないうちに司教たちの心を動かすべく、日本人が洗礼を受けることが必要であった。そのため、ベラスコは使者衆に洗礼を勧めたが、

この全ては、ベラスコの日本での布教拡大という信仰上からきた行動である。とは言え、形だけとわかっていながら、商人や使者衆に洗礼を受けさせる行為はベラスコの罪であり、神への裏切りである。

さらに日本の情勢が変わり、布教に対して寛大であった伊達藩ですら基督教への迫害をし始めたことを受け、ベラスコは初めて、「私は除け者であり、邪魔ものだったのか」「神の御意志を擱めなくなった」と言っている。この神への問いかけは、その後ローマに望みを託していくことから、ベラスコの「すべては神のために」という一人よがりな考えの上で成り立っていることが読み取れる。布教のための欲を持ち続けるベラスコではあるが、一方では、ベラクルスに向かう途中において、騙されるかもしれない状況の中インディオに終油の秘蹟を行い、日本に再度戻り囚われた際にも秘かに切支丹信徒の求める終油の秘蹟を行ったという点からも、終始司祭としての生き方を貫いているのがわかる。

ローマでも使者衆のもつ信書が無意味なものとなった時、ベラスコは泪を流しながら「ただ、あの使者たちがあまりに……哀れでございます。せめて彼らの名誉のため、面目のため、法王の御謁見を……」（第八章）と懇願をする。ベラスコも同じく無力な身となったにも関わらず、使者衆たちに同情する姿からは、傲慢な策略家ではなく、司祭としての姿が現れてくる。その後、使者衆のうち田中が自害すると、

（主よ、彼の魂をお見棄てにならないでください。でなければ、この私にその罪の罰をお与えください）（第八章）

と基督教において大罪を犯した田中が救われるようにと祈り、教会にとられない司祭ベラスコの姿が全面的に現れる。

ベラスコは、「主がお定めくださった私の運命」を受け入れるために日本に再び戻ることにする。その中で、ベラスコは自分とポーロとを比較し、ポーロに似た烈しい性格も、征服欲も、情熱も持ち合わせており、さらには欠点ま

で似ていると述べる。そして、心ひかれるポーロの説教の中で引用されたイザヤ書を口にする。

この民のもとに行きて、告げよ。

あなたがたは、たしかに耳で聞きはするが決して悟らないのだ。

たしかに眼で見ているが、決してわからないのだ。

その耳は遠く、

その眼はつぶっているからである。

その耳で聞き、

その心で悟り、

立ちかえって私に癒されることのないためである。(第十章)

この時の「あなたがた」には、イエスに対峙する、ベラスコや使者衆も含まれるのであり、日本に再び戻ろうとする船中において、ベラスコの日本人と共にあらうとする決意が読み取れる。ベラスコはポーロ会の司祭としての生きかたを貫き、大罪を犯した田中の為に祈りを捧げ、教会の与えたマニラでの生活を棄ててまで再び日本に戻ってきたのである。このベラスコの行動からも、主のためと語りながらも、地上の欲を抱き、日本人に形だけの洗礼を受けさせてしまったベラスコ自身の信仰の回心を見ることが出来る。またこの変化からは、

主よ、主が一体、この私に何を望んでおられるかをお示しく下さいまし。

主よ、すべて思召しのごとくあれかし。

主よ、私の心に今、芽生えはじめたものが、主の御意志であるならば、それをお示しく下さいまし。(第九章)

と二度にわたりイエスに語りかけ、全てを委ねようとしており、真摯に自分の持つ信仰を厳しく問いただしている姿が見られる。日本に戻り、捉えられた時（神がこの私に何を望まれているかがわかった以上、身を委ねよう。それは

決して弱々しい諦めではなく、主イエスが十字架で身をもって示されたあの絶対的信頼なのだから。」と、全てを神に委ね、死をも恐れずに信仰を全うしていくのである。

ベラスコは死の直前に役人から長谷倉と西の処刑を聞くと、「私も彼らと同じところに行ける」と叫んだ。信仰を全うして天国に召されていった二人のことを知り、自分もまた同じように信仰を全うできるという強い喜びが得られたからではないだろうか。ベラスコは、自分の死をも恐れずに受け入れて行つた。この姿に、長谷倉は対となつて呼応していると考えられ、よつて、長谷倉も死を自ら受け入れていったと暗示されているのではないかと考える。

三、長谷倉の変化

長谷倉の心情の変化を見るに当たり、長谷倉が侍であることは看過できない事実であり、實際旅に同行した商人たちとの違いも確認すべき点である。

商人たちは、取引と商いとを円滑にするために教会で進んで跪き、形だけの洗礼を受けた。彼らの最も優先されるべきことは利益を得ることであり、だからこそ、帰国後幕府からの商人へのお咎めは、起請文だけで許されたのである。侍である長谷倉は、お役目を上手く果たすためには、洗礼を受けることだと聞かされても、受け入れることはしない。

しかし、白石が発前に言つた

「役目のためならば、日本のしきたりや押し通すわけにはいくまい。日本で白きものが南蛮で黒きものならば黒と思えよ。心で納得いかずとも納得した顔をするのが今度の役目だ」(第二章)

という言葉に表されているように、決してなるまいと思つていたとしても、(形だけ)と洗礼を受けるに至つたので

ある。侍である長谷倉にとって主君の下す命が絶対であり、お役目を果たすことが最優先される問題である。しかし、葛藤の中で洗札を受けたにも関わらず、幕府は長谷倉と西を死罪として扱ったのである。そこには、政という御評定所次第で決定が変わり、そのたびに翻弄される侍の宿命がある。さらに、長谷倉は商人とは違い（形だけ）でさえ洗札を受けることに躊躇い、受洗したことを後悔し、洗札を受けた自身に（形だけのことだ）と言い聞かせようとしている。長谷倉が自分自身に（形だけ）と言い聞かせようとすればするほどイエスと向きあわさせられていき、この過程から形だけの信仰が本物となつていったと考えられよう。

「召出衆でも、人間ぞ」はじめて侍はこの時、傷ついた獣のような呻き声をあげた。「人間ぞ、召出衆も」（略）殿は決してあの両手をひろげたみじめな瘦せこけた男のように無力ではない。それらすべてを御存知の筈である。（第十章）

と、強い権力を持ち、絶対的存在の殿を信じて長い旅路を進んできたのであるが、その殿こそが「政」であり、全ての采配をされていることに気がつくのである。

この殿の姿勢を知った後は、何もなかったように目立たずにひっそりと生きていくことを強要された。その中で、旅から持ち帰った文箱を開け、元修道士からもらった紙束を見て長谷倉は元修道士を思い出すのである。

ノベスパニヤの教会で豊かな司祭たちが説く基督ではなくて、見棄てられた自分とインディオたちのそばにいてくれる「その人」がほしかったのだ。「その人、我等のかたわらにまします。その人、我等が苦患の歎きに耳かたむけ、その人、我等と共に涙ぐまれ……」（第十章）

と長谷倉は、元修道士という「自分」とインディオのそばにいるイエスの存在を感じており、元修道士とインディオをこの時「我等」と括ることができる。次に、長谷倉が下男である与蔵の横顔に対して、

あの男に似ているようにさえ思われた。あの男も与蔵のように首を垂れ、すべてを泳えているようだった。「そ

の人我等のかたわらにまします。その人、我等が苦患の歎きに耳かたむけ……」(第十章)

という場面において、与蔵と長谷倉が「我等」と括られる。(谷戸は世界であり、自分たちののだ)と言う長谷倉の感じる与蔵や谷戸を含む「我等」と、元修道士とインディオを含む「我等」とが繋がりを持ち、イエスの前では同じ「我等」となりえるのではないだろうか。

帰国後幕府の姿を知り、西は、(もう人間が信じられのうなりました)と言い、石田は、「人と人との間はそのように冷たく、そのようにむごいものである」と言った。この時、長谷倉は、石田が長谷倉ではなく、石田自身の「悲しみと怒り」を抑えるために話しているようだと感じている。長谷倉は、同じ使者衆として共に行動をしてきた西だけではなく、石田の悲しみ、御評定所を追われた白石の悲しみと、自分だけではない他の人間の悲しみにも気がついていくのである。これは、イエスの前では共に同じ「我等」であるという認識によって、感じるができるようになった悲しみであろう。川島秀一氏は『侍』のモチーフの成熟していく過程について触れられ「それは単に《同伴者イエス》とは何か、ではない。問題はさらに、そのイエスに貫かれた人間の一生とは何であるかなのである」⁽¹⁾と指摘された。長谷倉は元修道士にとつてのインディオの存在から、いわゆる同伴者と呼べるであろう「その人」像を理解し始めるのである。ベラスコが長谷倉に語ったイエスの生涯の中で、

イエスはそれを天の定める道と心得、この苦患を抗うことなく受けた。そして三日後、墓において蘇生して天にのぼった。(第七章)

という場面がある。この話を聞いて、長谷倉は奇怪なものと思っているが、このイエスの十字架にかかっていく姿勢と、長谷倉の死の受け止め方が相似するのではないか。よって、長谷倉は、いわゆる同伴者と呼べるであろう「その人」の理解だけに留まらず、自ら厳しい現実をその一生を通して受け入れていったのではないだろうか。

註

- (1) 川島秀一「回帰への旅程―『侍』論・遠藤周作ノート（4）」『日本文芸論集』第19号 一九九〇年三月のち『遠藤周作 愛の同伴者』一九〇頁 一九九三年六月

ま と め

蟻のように一列になり、川原にそって谷戸に戻る彼らの額にも雪がふれた（第一章）

この場面でも見られるように、長谷倉という人間は、総領でありながら、下男たちと同じように働き、この時代において内府や殿、石田にとつて集団の中にいる一匹の蟻にしかすぎなかった。しかし、長谷倉は「蟻」として扱われる弱い立場の自分を受け入れ、内府からの命令に従順に過ごしてきた。

「だが御政道の何かを知ってから、時折あの男のことを考える。なぜ、あの国々ではどの家にもあの男のあわれな像が置かれているのか、わかった気さえする。人間の心のどこかには、生涯、共にいてくれるもの、裏切らぬもの、離れぬものを―たとえ、それが病みほうけた犬でもいい―求める願いがあるのだな。」（第十章）

長谷倉はお役目を果たすことと黒川の土地の返還の望みが消えた時に、テカリに住む日本人元修道士の話を思い出すのである。長谷倉は望みもなくなり、思いを自由に発言することもできないが、側にいてくれる与蔵の姿を通じて、日本人元修道士の説く自分の哀しみを共に分かち合おうとしてくれる「その人」を理解していくのである。その姿を見出し、辛く長い旅を自分の中でどう捉えるべきなのか、と神に対峙することができた時に、苦しみや悲しみを共に持つというイエスの前ではみな同じ「我等」であるという関係が生まれた。さらには、「ここからは……あの方がお仕えなされます」という与蔵の言葉に長谷倉は頷き、つめたい廊下を進んで行った。これを長谷倉が自らの死を受け

入れていったと捉えることにより、「侍」として与えられた運命を全うしたと考えられる。また、ベラスコが死を受け入れていく瞬間に「生きた……私は……」（第十章）と言うに至ったことから、呼応する長谷倉の進んだ先には、信仰が本物になったという救いの光があると考ええる。

『侍』は、未信者であった長谷倉にイエスと向きあわせ、信仰を持たせた。また、傲慢な宣教師であったベラスコには、真摯にイエスの行った行為と自分の人生を重ねることによって、イエスの孤独、悲しみを感じさせ、そのイエスと対峙したという前提において両者の中に「我等」や、イエスの言うところの「あなたたち」という共通の関係が生まれていった作品と言えよう。

本論においては、長谷倉の心情の変化に注目をしたが、長谷倉とそれと呼応するベラスコの、この両者が旅を通して命をかけて信仰を本物にしていった人間として、真の信仰を得ていく過程を並行して示唆する形で描かれたところに、イエスとの共通の関係を見出すことが出来る。そして長谷倉の人生は、同じ地点まで収斂されていく人間として、ベラスコの回心の道と照らし合わせて見ていくことによって読み解くことができるのである。

——大学院文学研究科博士課程後期課程——